

## 屋敷林

金戸は砺波平野の散居村の風情が残っているが、明治初期の頃には専徳寺周辺に集中する集落であったが、大正期に分散して散居村のようになっていた。その根拠は明治八年の「土地原簿」の屋敷地の番地を見れば判るし、数百年以上の年輪のある屋敷樹の杉やケヤキなどがある家が無いことであり、屋敷林は大正期以後のものである。また戦後まで山田野原野が専徳寺北側から北陸荘まで続いていた。写真にも寺の北側に鬱蒼とした林が写っているのが判るが、昭和十六年には北側の樹木が食糧増産のために伐採されて切り開かれて水田化されている。



戦前のカイニヨ

カイニヨは、垣根のような樹木(屋敷林)や多い豊という垣饒(かきによ)がなまつてカイニヨと呼ぶようになったという説がある。

様々な木々が植えられており、高木にスギ、ケヤキ、エノキなど。中木にミズキ、ヒサカキなど。低木にキヤラボク、ウメモドキなど。果樹にビワ、イチヨウ、カキ、クリなどが植えられている。人々の生活に欠かせないもので強風から建物を守る(防風林)、燃料(落ち葉や枝を利用)、家の増改築等の建築資材、果樹や薬草を植えて食糧や薬に供したといわれる。

寛政元年に宮永正運の『私家農業談』にて屋敷林について、「農家屋敷廻りに、木を植えるに多徳あり、第一風寒を防ぎ、盗賊の要心と成、或いは、隣家の火災の難を防ぐ也、枝葉は、薪の絶間を助け、しん木は間を抜き伐て、材用を足し、落葉は、竈の賑わいとなし、又は、田畑の糞の補いともなる事也」と多徳の効用があると述べている。古来からの言い伝えに「高を売つてもカイニヨを売るな」の言葉があり、先祖からの屋敷林を大切に守り伝える事を誇りとしていた。

金戸でカイニヨは減少しているが、明治初期まではほとんどの家にカイニヨがあったが、明治後期から政府の食

糧増産政策から増産を妨げている陰樹伐採を奨励した。また太平洋戦争中の軍需用材供出により景観を一変させることになった。直径一尺五寸以上の杉が対象となり戦争激化により寺の境内林までが供出させられたが、供出を拒否した者は非国民といつて非難された。杉以外は供出の対象にならなかった。品川正雄の背戸・江実のケヤキなどは最近まで残っていた。

しかし天皇制軍国主義の保持のためか神明社の社叢は対象外とされた。

現在は松田昭夫・森井信一・松田一夫の間兵衛島辺りと専徳寺・山本良昭

- ・ 東頭光久
- ・ 山崎三郎
- ・ 中川力の
- ・ 松田昭夫



宮塚久一の茅葺き

の屋敷林も戦時に供出されて一本だけが残っているが、他の杉は小さかったもので供出を免れものが現在の杉である。現在の金戸屋敷林は戦時に伐採した後、稚苗を植えたか供出を免れた小さい杉が成長したものである。



屋敷の関する用語として、家の正面をオモテ、マエバ（東側・正面）と呼び、またセド（西側・裏）、オモテブラ（南側）、北ブラ（北側）と特別の呼称がある。蔵を南側に建て、生活排水のツボ・灰小屋を北側に、納屋をマエバにと建物の配置が決まっていた。

また屋敷の入口をジヨウグチ、家の外をカイド、庭をロジ、茅葺き屋根をクズヤなどと呼んでいた。

茅葺きをクズヤと云うが、戦



東頭久光の茅葺き

後に屋根を瓦に葺き替えていく中で、吹き替えていない家と呼んだものであろう。

茅葺きは三〇年ほどで吹き替えが必要であり、毎年末に「棟つつみ」をしないと年を越せないと言われたように、耐用年月・維持管理は瓦の比ではなかった。また金戸には「棟つつみ」の名人がおり一一・一二月は引っぱりだこであった。

現在の屋敷林のある南砺の民家は切妻屋根アズマが多いが、藩政時代からあるのだろうか。藩政時代は入母屋茅葺き屋根がほとんどで、後に屋根を

葺き替えて切妻屋根アズマにしたものである。金戸でも一番の古い中川力の屋根のような入母屋茅葺がほとんどであり、松田昭夫も入母屋の茅葺屋根を吹き替えて、大屋根で両妻部分から下屋が出ている切妻屋根アズマ建ちに替えたものである。

純粋にアズマで建てられたのは乗松吉雄が初めてであろうか。

### 社叢林

鎮守の森は往古のその地域の原植生を残しており、かつてのその地域の自然を知るための数少ない手掛かりになる植栽となっていると思われるが、金戸の神明社は昔の植生を残していると云えない。明治十一年の遷宮願には、境内地が一八七坪で間口二間・奥行二間三尺の茅葺本殿があった。大正三年に本殿、そして昭和十六年に拝殿が新築された際に隣接の地主から寄進されて現在の境内地になっている。

トガ・ケヤキ・大杉は藩政期までの樹輪があると思うが、他の杉は皇紀二千六百年の祝賀記念として「全氏子六十余名ハ各々一本幹長四尺ノ若杉を境内に付植シタ」とあるのでその植樹のものである。その時植樹された杉は陰

になると田の地主により三・四畝の高さで芯が止められたので、仕方なく伐採されて数本しか残っていない。

そのように金戸の社叢は直接的な人間の手による植栽であり、原植生のもものは無いと云える。昭和五十年代に城端の町木である越の彼岸桜が移植されて春の彩りとなっている。



### 叢林の野鳥

叢林にはいろいろな虫を育て野鳥にも多様な環境を提供している。渡り鳥や国内を四季により移動する漂鳥も立ち寄っている。一年中生息



モズ 3/16

している留鳥のサギ・キジ・メジロ・セキレイ・ヒヨドリ・モズ・ムクドリ・トビ・スズメ・オナガ・カラスを見ることが出来るがフクロウは見られなくなった。